

「生きるを支える」一人とのつながりから

私がA氏と出会ったのは、初めての領域別実習である。A氏は肝硬変の末期であり、緩和医療を求めている。私がA氏に会って衝撃を受けたことは、「自宅に帰ってから何をしたいか」と尋ねたところ「死の準備をしなきゃね。」と言われたことである。その時私は何も返事をする事が出来なかった。その後の話の中でも死について語る場面が多くあった。一方「やっぱり死ぬのは怖いね。」ともおっしゃっていた。今まで死に直面したことがない私は、どうしたらよいかわからなかった。死に向かうことがどれほど怖いことなのだろう、その怖さの中でA氏は何を感じているのだろう。私には理解することはできなかった。頭が真っ暗になってしまい、涙を流してしまった。

看護師である母からは、「看護師だって泣くときはあるよ、だから泣いてもいいんだよ。患者さんが今を生きることを支えることが看護師には必要だと思うよ」と声をかけてもらった。この時私は死と直面しているA氏と向き合うことが必要であると感じた。その結果A氏との関わりでは、現在生じている苦痛を緩和させることが必要な看護であると捉えた。ぎゅっと握られた手や、緊張した肩をさすりながら会話を進めることを意識した。A氏は「1人でいると怖かった。あなたがいてくれるだけで安心する。」とおっしゃった。A氏は日に日に表情が明るくなり、「娘に会いたいな…。もう少し頑張りたい。」と前向きな言葉を表現するように変化した。「触れる」という小さなことが、孤独を払拭し、希望を見出すことが出来ることに気が付いた。そこで、看護師と患者の関わりに目を向けてみた。そこでは、担当ではない患者に声をかけることや、何気ない関わりの中でタッチングを行っている様子があった。患者の表情は明るく、必死に生きようとしている様子があった。

この経験から、人の手の温かさや1人ではないと感じることが出来る時、生きる希望を見出すことが出来ると感じた。「生きる」を支えるとは、そんな人とのつながりを作ることではないか。日常生活でも、人はだれかを支え、誰かに支えられながら生活をしている。誰でも1人で生きることはできない。孤独を感じる時、人は時として、否定的な感情にとられる。それを肯定的に変えることが出来るのは、やはり人である。人との関わりの中で生活している人だからこそ、人と人とのつながりは生きるうえで必要不可欠な要素となる。人を対象にしている看護では、その要素が重要となる。

そんな人と人をつなぐ看護師に私はなりたい。看護師は医師のように病気を治すことはできないが、病気と向き合い必死に生きようとしている患者を支えることは看護師にしかできない。入院中は、誰もが孤独になりやすい。その中で、患者のそばに1番近い存在である看護師だからこそ、孤独を人と人がつながる輪に変える手助けをしていきたい。